

優秀賞

住みやすい社会創りに関わりたい

東川町立東川中学校3年

ひろせ あや
廣瀬 彩



自分にとって言葉や声が必要であるように、手話を必要とする人がいる。これは、当たり前のことだ。立場を変えることで、その当たり前に気づき、不便な部分が見えてくるのではないだろうか。

私は、去年から「手話を楽しむ会」というサークルに参加している。「楽しく手話を学びましょう」という少し緩いサークルだ。

きっかけは、私の知り合いに、耳は聞こえるが、言葉を発することが難しい人がいたことだった。

耳は聞こえるので、声をかければ反応はしてくれる。でも、発話できないため、声での返事は無い。彼女は常に持ち歩いているホワイトボードに、私に伝えたいことを書いて、見せてくる。仕方がないことだが、私は少し寂しかった。常に彼女の目や表情を見て、会話をしたかった。彼女は手話ができるため、自分が手話を覚えれば、彼女を見ながら会話をできるのではないかと考え、手話を習いはじめた。

ところで、私はドラマや映画が好きで、特に聴覚障害がテーマのドラマや映画があると欠かさず見るようになった。俳優がせっかく手話を覚え、豊かな表情もつけながら演じているのに、意味がわからないので、どうしても字幕を見ていたが、手話を覚えることができたなら、俳優の手元や表情をリアルタイムで楽しめるようになった。手話を覚えたことで、私はワンランク上のドラマ好きになれたのだ。

そんなある日、参加し始めた手話サークルで、「電話リレーサービス」を知った。

声を発することが難しいと、電話を利用することは難しい。以前見たドラマで、聴覚障がいを抱える登場人物が電話をかけたシーンでも、その登場人物に会話が聞こえることはもちろんなかった。ビデオ通話をするシーンもあったが、通話できるのは手話を使える人だけ。耳が聞こえない人や声を発することが困難な人は、すぐに誰とでも電話でつながることはできないだろうか。

そんなことはない。令和3年度に制度化された「電話リレーサービス」では、通訳オペレーターが「手話」や「文字」と「音声」で、聴覚や発話に困難のある人と耳が聴こえる人との通話をつな

げてくれるのだ。たとえばホテルやレストランの予約の時、SNSだと難しい細かな打合せが、電話リレーサービスなら可能だ。119番などの緊急通報もこのサービスでできるようになり、安心して暮らせるようになる。このサービスが普及すれば、誰でも電話を利用することができるのだ。

サービスが始まって1年3ヶ月が経った段階で、電話リレーサービスの認知度は21%。この数値は高いとは言えない。私も手話サークルに参加していなければ、知ることはなかった。必要としている人にとって便利なサービスだが、多くの人を知る機会が少なすぎるのだ。

私の住む東川町には、タブレット端末で手話の通訳を行うサービスがある。役場の方に聞いてみると、このサービスに関わる職員は1人しかおらず、全職員が認知しているわけではないようだ。また常に利用できるわけではなく、使うためには予約が必要らしい。それでは、利用する側にも負担が大きく、日常的に利用することは難しい。

どうしたら、あらゆる人が快適に生活できる社会を創ることができるのだろうか。大多数の人が不便を感じていないことを、小数派の視点から改善することは難しいのだろうか。

旭川市では、2016年に、手話言語条例が定められた。聴覚や発話に困難のある人たちにとって、安心できる町づくりを目指したものだ。全ての人が快適に、安心して暮らせるようにするためには、国や地方自治体など行政の取組は、欠かせないのだ。

私は、手話を通して言語聴覚士という職業に興味をもった。発話や聴覚に困難を抱える人々と関わりながら、色々なことに興味を持ち、視野を広げ、耳を傾け、誰もが住みやすい社会創りに関わりたい。